巻頭エッセイ

咲き続くサルビア

一般財団法人 民事法務協会 監事　佐藤　努

1964年10月10日、日本晴れの下、東京オリンピックが開催された。敗戦から19年、高度経済成長期にあるとは言え、未だ沖縄も小笠原諸島もアメリカの施政権下にある中での開催であった。メインスタジアムは国立霞ヶ丘競技場陸上競技場、所謂国立競技場（1958年建設・2015年解体）で前年に大幅な拡張工事がなされ、収容人数7万人超の巨大スタジアムに生まれ変わっていた。当時は日本国中オリンピックムードに充ち満ちていたように思う。

待ちに待った東京オリンピック。数多くの日本選手が活躍する中にあって、最も私の記憶に残っているのがマラソンの円谷幸吉選手である。円谷選手は1940年5月13日、父幸七氏・母ミツ氏の六男として福島県岩瀬郡須賀川町（現須賀川市）に生まれた。町内でも厳格なことで有名な父に躾られて育ち、競技者としては駅伝でその才能を開花させ、1963年には2万mで世界記録を、5千mで日本記録を連発するなど、トラック走者として注目されていた。初めてマラソンに挑戦したのは東京オリンピックの7か月前、その後2回走り、東京オリンピックは僅か4回目のマラソンであった。下馬評でのメダル候補一番手は君原健二選手、二番手が寺澤徹選手、そして三番手が円谷幸吉選手であった。急成長していたとは言え、まだまだ経験不足と認識されていたのである。

ところが結果は、君原選手は第8位、寺澤選手は第15位であったのに対し、円谷選手は第3位・銅メダルを獲得し、国立競技場には陸上競技唯一の日の丸が掲揚されたのである。これだけでも日本国民の記憶に残る出来事であったが、その記憶をより鮮烈にしているのが、競技場内でイギリスのベイジル・ヒートリー選手に抜かれてしまったことである。ご存知の方も多々おられると思う。円谷選手は競技場に2位で戻ってきたものの、42.195kmの最後のトラックで、7万人超の大観衆の見守る中、抜かれてしまったのである。

円谷選手は競技場内で一度も後ろを振り向かなかった。否、そもそも円谷選手は競技中決して後ろを振り向かないのである。これは、子供の頃に父親から「男たるもの、後ろを振り向いてはならぬ。」と躾られたことよると言われている。当時のマラソンは「持久力と経験の競技」と認識されており、経験による駆け引きが必須とされていた。この常識からすれば、「後ろを振り向かない」ことはあり得ないことなのだが、円谷選手は決して後ろを振り向かない。私は円谷選手の「走り」には、ひたむきさや忍耐強さに加え、生き方そのものが滲み出ているように感じられてならない。

競技場内で抜かれたとは言え、日本国民は円谷選手に対し賞賛の声を惜しまなかった。しかし、円谷選手本人は違っていた。日本国民の皆様に大変申し訳なく、お詫びしなくてはならないと心底悔やんでいたのである。レース終了後、控室で円谷選手に

出会った君原選手は、まるで途中棄権したような「さみしそうというか、哀しげな雰囲気さえ漂っていた。」との印象を受けている。レース後の記者会見で円谷選手は、「あと4年間、きっちり練習すれば、メキシコではもっといい成績を残せるでしょう」と述べ、「メキシコでもう一度、日の丸を揚げる。これは国民との約束だ。」との思いを強く抱くようになっていったのであった。

一夜にして日本中の脚光を浴びることとなった円谷幸吉氏であるが、オリンピック後にマラソンに参加したのは1965年8月と1967年3月の2度だけで、前者は途中棄権、後者は自己ワースト記録であった。実は、アキレス腱炎と椎間板ヘルニアに悩まされ「立っているとつらくなり、また痛みのため、走るにも走れず、足を上げようとすると痛みが足や腰を襲う」程の体調であった。この状況から脱すべく手術を決意し、メキシコオリンピックが翌年に迫る1967年8月に入院する。入院時の新聞では、「東京オリンピック・マラソン3位の円谷幸吉陸上自衛隊三尉（27）は、右アキレス腱手術のため8月6日から東京・品川区の病院に入院した。医師の診断では、アキレス腱の一部が切れており、手術すれば元通りに活躍できるだろう、という。入院は3週間の予定。」と報道されていた。不思議にも重傷であった椎間板ヘルニアの記述はなく、これによる深刻な状況にも触れられていない。マスメディアも、そして私自身も、円谷氏は東京オリンピックで示した卓越した精神力、超人的な体力と粘りで病気を克服し、きっとカムバックするであろうとの期待を抱き続けていたのであった。

一方、円谷氏は、「国民との約束」が脳裏から離れることはなく、入院中にも主治医に対し「もしメキシコオリンピックに出られなかったら、わたしは国民を裏切ったことになるのでしょうか」とその胸中を吐露している。入院から3か月後の11月、やっと退院はしたものの術後の体調は決して思わしくなかった。むしろ、以前より腰痛を感じていたようであるが、円谷氏は決してそのことを語らない。主治医に対しても、世話になったことに対する感謝の気持ちであろうか、体調は良く走りやすくなったと報告し、マスメディアに対しても、メキシコオリンピックを目指して全力を尽くすと応えていたのである。

誰もが円谷氏の深刻な病状を知らなかったし、知ろうともしていなかった。術後の年末、静岡県下田市で自衛隊体育学校の仲間と5日間の合宿に入るのだが、腰痛が襲い、もはや走れる状態ではなかった。円谷氏は既に、一筋の光さえ見出せない暗黒の中を彷徨っていたのではなかろうか。

1968年1月9日、練馬区にある自衛隊宿舎において自殺している円谷氏が発見された。このニュースはマスメディアによって瞬く間に全国に流布され、遺書までもが公表された。国民の受けた衝撃は計り知れない。多感な年頃であった私自身も、全身震えるような衝撃を覚えたのだった。そして、無邪気に他者を応援することは罪深いことなのか、漫然と他者を理解しないでいることは放漫なのかと沈吟した。以後、私の「応援」は屈折したものになっていったように思う。

君原氏もまた深く苦悩していた。「円谷君と同年齢であり、おたがいにニュージーランド遠征や東京オリンピックを体験していた私は、彼を理解し、彼のなやみをなぐさめることができた。もし東京と九州という距離がなくていつも彼と語り、杯を交わして、苦しみを打ち明けあっていたなら、ぜったいに自殺に追い込むことがなかったと信じている。彼とこうした機会を進んで持とうとしなかった怠慢を心から悔いる。かけがいのない心の友を失ってしまって、ああもこうもと思うばかりで悔いを千載に残してしまった。もし東京オリンピックで

逆に私が三位に入っていたならば、私が自殺に追い込まれていたのではないかと背筋が凍るような思いであった。」と。

円谷氏の死後、父幸七氏・母ミツ氏は、実家の横に遺品を展示した「円谷幸吉記念館」を開設し、寝起きもしたと言う。遺書にある「幸吉は父母上様の側で暮らしとうございました」との願いを重く受け止め叶えたもので、お二人の死後は、幸吉氏の兄・喜久造氏らご家族によって守られてきた。2007年遺品は須賀川市に引き継がれ、須賀川市では新たに「円谷幸吉メモリアルホール」を開設し、公開し続けている。

2020年に再び開催されることとなった東京オリンピックは、大変嬉しいことである一方、改めて私に円谷氏の自殺と向き合うことを迫るものでもあった。1年延期されたオリンピックも終わった2021年10月、念願ではあったものの行くことを躊躇っていた「円谷幸吉メモリアルホール」を訪ねることにした。偶然にも丁度リニューアルオープンした直後であり、また1983年から毎年開催されている「円谷幸吉メモリアルマラソン大会」の開催時期でもあった。旅行先からの帰路で、到着したのが閉館時間ギリギリになってしまったが、事情を察した関係者の方々の暖かいご配慮によりゆっくりと拝観させて頂けた。想像以上に大変立派な施設となり、館内には東京オリンピックでの銅メダルや使用したシューズ、着用した日本選手団の制服、数多くの賞状や盾、そして遺書（写真）までもが、丁寧な解説とともに労るように展示されていた。静寂としたメモリアルホールで、地元の方々のご厚情に感謝しながらこれらの遺品を拝見させて頂くうちに、50余年前の熱い感情が込み上げてくるとともに、今でも円谷氏が須賀川市民から暖かく見守り続けられているように感じられ、心安らぐような気持ちも芽生えてきたのであった。

また、2020オリンピック開催に伴う全国聖火リレーで、君原氏は須賀川市を走られ、走り終えた後にユニフォームの下に忍ばせていた円谷氏の写真を取り出し、今日は円谷氏と一緒に聖火リレーを務めたいとの思いで走ったと述べられたことを拝聞した。更に、君原氏は「円谷幸吉メモリアルマラソン大会」にほぼ毎回参加されておられ、その際に必ず円谷氏の墓参りもしているとのことであった。君原氏と円谷氏の交流は今も尚止むことなく続いたのである。この事実を知り、私の心は更に救われていくように思われた。

1964オリンピックの際、須賀川高校の生徒たちは母校の先輩である円谷選手への応援の気持ちを込めて、サルビアを手に聖火リレーを盛り上げ、兄・喜久造氏はその時のサルビアの種を育て続けられておられた。この種を須賀川市ではメモリアルホール来館者等に配布していくとのことで、有難いことに昨年私も頂戴することができた。今年、育ててみようと思っている。

（追記）最後に、参考とさせてた頂いた書籍をご紹介しておく。

- 「敗れざる者たち」著者・沢木耕太郎（発行所　株式会社文藝春秋）
- 「もう走れません」著者・長岡民男（発行所　株式会社講談社）
- 「オリンピックに奪われた命　円谷幸吉、三十年目の新証言」著者・橋本克彦（発行所　株式会社小学館）
- 「君原健二聞書き　ゴールは無限」著者・助清文昭（発行所　株式会社文芸社）
- 「孤高のランナー　円谷幸吉物語」著者・青山一郎（発行所　株式会社ベースボール・マガジン社）
- 「円谷幸吉　命の手紙」著者・松下茂典（発行所　株式会社文藝春秋）
- 「1964　東京の記憶」（発行所　JTBパブリッシング）